平成８年（１９９６年）８月２０日
第９２回『２１世紀塾』参考資料
（第４回提言）

水源域の関係者を含めた「河川流域水資源涵養促進協議会」の設置について

『２１世紀塾』代表世話人　小野　徹

【問題提起】

今年は、梅雨入りした後になっても、関東の水瓶である利根川上流部の降水量が少なく、無残にも底をさらしたダムの写真が、週刊誌の巻頭を飾っていた。

これは別に関東だけの話しではない。本県の佐久間ダムもニュースに取り上げられていたし、四国や中国地方、北九州などでは、毎年のようにどこかで、水不足、水飢饉の恐怖が叫ばれ、給水制限等が行われている。

ところが、その解決策としては、「夢の２１世紀」を迎えようという時代になっても、まだ「台風にでも頼るしかない」などという物騒な意見が交わされている。

人間が生きていく上で、最も大切な水が、こんな「綱渡り状態」で良いのだろうか。

葦原の瑞穂の国「日本」が、この先も、まだこんな「無展望・無策状態」でいて良いのだろうか。

まず第一に考えなければならないのは、何故、こんなことになってしまったのかについてだが、この最大の理由は、林業経営が不振に陥ったことから、森林の適切な維持管理ができなくなり、水源域の涵養能力が激減、又は、損なわれてしまったからだとされている。

これは近年の歴史を少し振り返れば明らかで、上流部の水源域が荒廃するに従って、雨が少なければ極端な水不足に、少しまとまって振れば、こんどは奔流となって中・下流域に大災害をもたらして来たものであり、自然界から人間への、わかり易く、ありがたい「警告」として受け止めていかなければならない。

そこで、これへの対策だが、残念ながら、我が国のように、降った雨が間を置かずに海に流れていってしまう急峻な地形、又、そうしたいとする行政姿勢の中では、上流域と、中・下流とが一緒になって何かしようとする結びつきが、希薄だ。

治水においても、利水においても、運命共同体である筈なのに、その意識はなかなか醸成されてこなかったといえる。

そんな折り、たまたま天城森林署長にお目にかかったところ、狩野川の関係者から新しく発足する「狩野川倶楽部」の発起人に名を連ねることを頼まれて、「こんなことは今までになかったことだ」と驚いていた。

本来は一級河川は建設省が、それ以外の河川は県が管理しているので、建設省や県がいろいろな組織を主催したり、後援することはあっても、そこへ天城営林署長が誘われることなどなかったのだが、自然発生的な「狩野川倶楽部」自体が、「河川をどうこうしよう」というより、「皆んなで、いかに狩野川を楽しむか」に重点を置いた組織作りをしようということから、最上流地域の管理者である天城営林署長にもお声がかかったというわけだ。

建設省や県を中心に、各河川流域の関係市町村が集まった協議会などは、とうの昔に設置され、活動もしてきているのだろうが、一民間組織とはいえ「狩野川倶楽部」が、最上流で水源の涵養に努めている天城営林署長にも参加を呼びかけたことは、「流域のすべての関係者の結束」こそが、地域の将来のあるべき姿であることを暗示しているように思われる。

まして現在の最上流部の森林は、水源の涵養だけに止まらず、景観や環境の面からも、中・下流域からは大きな関心を寄せられているものであり、その意味からも、各河川の流域毎に、すべての関係者が集まって、同一テーブルに着くことは意義深いものになるに違いない。

とかくタテ割りといわれる、国のそれぞれの機関や、県、自治体といった行政範囲を超えて、同じ河川に関連するの上・中・下流域すべての関係者を含めた「流域水源涵養促進協議会」といった組織を作って、皆んなの知恵を結集しさえすれば、２１世紀を再び「山紫水明の日本に」取り戻すことができるのではないか、と期待するものである。